

いて巫に對する當時の蒙古語を探して見ると、Rubruckの旅行よりも十數年以前に蒙古人によりて編纂せられた蒙古語の元朝祕史には孛額思なる語があつて、明譯には之を師公と譯し、那珂博士の譯には師巫カンナギと見えて居る、孛額思は今の蒙古語の böye 即ち巫に當り思はその複數の語尾 S を寫したものである。またこの外にも Marco Polo の紀行には巫に當るものを baci と呼んで居るが、これは後に述べる如くもとより本來の蒙古語ではない。Pian de Carpine の蒙古人に關する記事の中に

*They pay great attention to divinations, auguries, soothsayings, sorceries, and incantations. And when the devils answer them they believe that a god has spoken to them; and they call that god Itoga, but the Comans name it kam. (Rockhill. The Journey of Rubruck, p. 246, note 2.)*

といふて居る中の Itoga は既に多くの學者の注意する所となつて、蒙古語の etugen 即ち土地の義で Marco Polo の natigan といふものと同じだらうといはれて居るけれども、自分はそうは信じない、これは恐らく Carpine の誤聞に歸すべきで、Coman 語では kam (巫) といふと記して居ることから考へて見ても they call that god Itoga ではなく they call that devils (or diviners) Itoga 即ち神の憑つた巫を指したものに違ないと思ふ、今日でも蒙古語で女巫のことを Itogan といふのは即ち此の語に相當するものであらうし、ツングース語で女巫を idakon 巫の服裝を、idägä といふのは恐らく此の蒙古語の入つたものであらう。

以上述べた所によると蒙古語としては itogan もしくは böye が師公師婆に相當するものであつて、kam といふのは蒙古に用ゐられたにしても當時の外來語、即ちウィグル語の如きものから入つたもので、Rubruck は會々此